

東アジアにおける越境経営の先例

新羅坊・倭館・唐人屋敷を拠点とした貿易と国際活動

金 光 林

はじめに

現代社会のグローバル化が進むにつれて、「越境」というテーマがいろんな研究分野において注目されている。今回の環日本海学会第11回学術研究大会におけるメインテーマが「越境経営」であるので、この機会に、前近代の東アジアにおいて国境を越える人間の移動と経済活動がどういうふうに行なわれたかについて考えてみたい¹⁾。

今回の発表では、8・9世紀頃に中国の唐の黄海沿岸地域に形成された新羅人の居留地「新羅坊」、中世から近世にかけて朝鮮に設置された「倭館」、そして近世に日本の長崎に設置された「唐人屋敷」を比較研究することによって、朝鮮人・日本人・中国人が前近代の東アジアにおいて、国境を越えて行なった移動と経済活動の具体的事実をより明らかにし、異国・異文化の中での接触と交流及び生活の様相を考察してみたい。

一．新羅坊・倭館・唐人屋敷

1．新羅坊

新羅坊とは中国の唐の時代に黄海沿岸地域に存在した新羅人の集団居留地のことである。

8世紀半ば以降、統一新羅と唐との関係が円滑に進み、両国間の人的・物的交流が進むにつれて、多くの新羅人が唐に移住するようになった。その中で、淮河・揚子江の下流地域の登州・徐州・漣水・楚州などの中国大陸と朝鮮半島とを結ぶ水路の要地にあたる都市に新羅人が集団的に居住することが多く、そこでは新羅人による自治が行われ、その地域が「新羅坊」と呼ばれた。新羅坊には、自治行政機関としての「勾当新羅所」が置かれ、その長として惣管があり、その下に訳語という通訳者がいて中国人との交渉業務を主管した。また、地方にも新羅人の村落が存在していたとみられる。

新羅坊は黄海沿岸地域の都市に設置され、その新羅人たちは主に商業・運送業・貿易・造船などの商工業に従事し、新羅本国と日本に往来しながら、黄海・東シナ海の海上貿易を主導していた。また、新羅坊の新羅人たちは唐の明州・蘇州・揚州などの当時の国際貿易港でアラビア・ペルシア商人たちとも活発な交易を行った。

在唐新羅人社会に大きな影響力を持った人物に海上王と呼ばれた新羅の張保臯(?～846)があり、

1) 本論文は、今年の10月2日に弘前大学で開催された環日本海学会等11回学術大会で発表した原稿を整理したものである。

彼が黄海・東シナ海の海上貿易を主導し、在唐の新羅坊の繁栄は彼の影響力によるところが大きかった。張保臯の在唐の拠点としてとりわけ登州文登県の赤山が繁栄し、そこには新羅人の自治組織として勾当新羅所があって惣管が監督しており、張保臯の創建になる仏教寺院 赤山法華院では夏冬の講会に集う新羅人が200人にのぼったという。

また、登州には新羅館があって唐へ行き交う新羅の使節団や留学生の利用に供された。

8世紀から9世紀にかけて唐の黄海沿岸地域に存在した新羅坊など新羅人社会の存在は唐の記録から僅かな痕跡しか残っておらず、むしろ平安時代の日本の僧侶円仁の『入唐求法巡礼行記』によってその凡その状況が伝わっている。

2. 倭館

倭館は、中世から近世にかけて、朝鮮王朝（李朝）下の朝鮮半島南部に設置された日本人居留地のことである。

文禄・慶長の役（壬辰倭乱・丁酉再乱）以前は数ヶ所に存在したが、江戸時代には釜山に限定され、日本側は対馬藩が朝鮮との外交、通商に当たった。倭館の機能は、日朝両国の外交と貿易を推進するための、いわば公館と商館の両者を兼ね備えていた。

1392年に成立した朝鮮王朝は、同時期に成立した中国の明王朝のように朝貢船以外の商船入港を禁止するようなことはなく、入港地にも制限を加えなかった。そのため、日本の大名・商人らが朝鮮に通交するものが急増したが、彼らの中には交易に不都合があると倭寇に変貌するものもいたので、朝鮮政府は1423年頃国防上の見地から日本商船（興利倭船）の入港地を東萊豊山浦（現在の釜山広域市）と金海府乃而浦（現在の慶尚南道鎮海市）に限定した。その後、日本の使送船（公式の使者を運ぶ船）の入港地もこれらの2港に限定された。

当時、朝鮮貿易に大きな利権を持っていた対馬の早田左衛門太郎は、1426年、慶尚左右道各地で任意に交易できるようにして欲しいと朝鮮の朝廷に訴えたが、拒否され、代償として蔚山の塩浦（現在の蔚山広域市）が入港地に追加された。

これらの港は当初日本船の入港指定地に過ぎなかったが、やがて多数の日本人が住み着くようになり、朝鮮側はこれを完全に制止することが難しかった。これがいわゆる三浦倭館である。

倭館に居住する日本人を朝鮮では「恒居倭」と呼び、居留地内では首領を頭とする自治が行われた。恒居倭の中には漁業や農業に従事したり、朝鮮の農村に行商に赴く者もいた。しかし、日本人商人には営業税、耕作者には田地税が課税され、さまざまな規制がかけられ、交易上のトラブルもあって、1510年には対馬から援軍が駆けつけて大規模な日本人の反乱が起こった。この「三浦の乱」は朝鮮側の武力によって鎮圧され、三浦倭館は閉鎖されたが、後に一部再開された。

1592年に始まる文禄・慶長の役によって日朝両国の国交は断絶し、戦争直後に対馬藩が送った貿易再開を求める使者が帰ってこないこともあった。しかし朝鮮人捕虜を送還するなど対馬藩の必死の努力によって、1607年最初の朝鮮通信使が来日し、国交回復が決まった。対馬藩は江戸幕府から朝鮮外交担当を命じられ、釜山に新設された倭館における朝鮮貿易の独占権も付与された。1609年に締結された己酉条約によって、朝鮮は対馬藩主らに官職を与え、日本国王使としての特権を認めた。しかし、日本使節のソウルへの上京は一度の例外を除き認められなかった。また日本人が倭館から自由に外出することも禁じられた。

江戸期の倭館は富山浦内の豆毛浦から草梁に移され(1678年)、対馬から代官が派遣されて外交や公私の貿易をそこで行った。倭館の住民は常時400人から500人程度と推定され、対馬から貿易船が到着すれば倭館滞在者がさらに増えた。

江戸時代を通じて、長崎は海外に開かれていた唯一の鎖国の窓として名高いが、その長崎の出島とは正反対に、朝鮮に拠点を置き、常時数百名が二百年間にわたって続けていた対馬の海外貿易拠点が倭館であり、それは長崎の出島より遥かに規模が大きかった。

3. 唐人屋敷

唐人屋敷とは、近世の鎖国下の長崎において、「唐船」乗組みの中国人(清人)、東南アジアからの華僑・現地人を収容するために設置された施設のことであり、現在の長崎市館内町にあった。

1635年から江戸幕府は中国商船の入港を長崎一港に制限する措置を取ったが、キリスト教徒ではない中国人は長崎市内に雑居することを許されていた。しかし、密貿易が増加したため、長崎奉行所では中国人の居住地区も制限することになり、1688年に長崎郊外にある十善寺郷に幕府が所有する御薬園の土地で唐人屋敷の建設に着手し、翌年完成した。広さは約9,400坪に及び、2千人程度の収容能力を持った。周囲は塀と塀で囲まれ、大門の脇には番所が設けられ、出入りを監視した。ただ出島のオランダ人が厳重に監視されていたのに比べ、中国人は比較的自由に出入りが許された。

1698年の大火で五島町や大黒町にあった中国船の荷蔵が焼失したため、倉庫に目が届きやすいよう、唐人屋敷前面の海を埋め立てた中国船専用の倉庫区域を造成した。この地域が新地と呼ばれた。1784年の大火により唐人屋敷全体が関帝堂を残して全焼、大火以後唐人が自前で住居などを建築することが認められた。

近世の鎖国時代における日本唯一の海外貿易港であった長崎において、出島と共に海外交流の窓口として大きな役割を果たした唐人屋敷は、1859年の開国によって廃屋化し、1870年に焼失した。その後も在住した中国人たちによって隣接の長崎市新地町に中華街を形成し、長崎新地中華街となった。

唐人屋敷の遺跡としては、明治期に修復改装された土神堂、観音堂、天后堂、1868年に福建省泉州出身者によって建てられた旧八門会所、1897年に改装、改称された福建会館前門が残っている。

二、新羅坊、倭館、唐人屋敷を拠点とした国際貿易

唐の黄海沿岸地域に存在した新羅坊を拠点に新羅人たちは8・9世紀の東アジアにおいて最も活発な海上貿易活動を行い、その中心にいたのが新羅の商人張保臯である。張保臯は黄海・東シナ海の海上貿易を主導し、唐・新羅・日本にまたがる海上貿易を行った。張保臯は地理的にも新羅・唐・日本の交差点に位置した新羅の清海鎮に国際貿易の拠点を設置し、在唐新羅坊、日本の博多に設置した貿易拠点のネットワークを活用しながら、本格的な海上貿易を行った。張保臯の海上貿易は新羅・唐・日本に限らず、東南アジア・インド・ペルシア・アラビアとの中継貿易にまで及び、扱う商品も広範囲に渡った。

張保臯の海上貿易において、唐からは主に工芸品・高級絹織物・お茶・書画・仏経・陶磁器など

を輸入し、唐には金銀工芸品・金・銀・銅・薬材・高麗人参・毛皮などを輸出した。日本からは絹織物・糸・金などを輸入し、日本には金属工芸品・高級絹織物・薬材・香料・動物・仏経・仏像などを輸出した。東南アジアとイスラム諸国からは孔雀・エメラルド・香料・ガラス製品などを輸入し、絹織物・剣・毛皮・陶磁器・高麗人参などを輸出した。

8・9世紀には新羅人が広範な国際的ネットワークを活用しながら、黄海・東シナ海の海上活動を主導していたので、日本の遣唐使は新羅通訳の案内と幹旋を受けて唐へ往来し、遣唐使の船舶には新羅の船員を採用するか、直接新羅の船舶を利用する 경우가多かった。遣唐使は帰国する際、在唐の新羅坊に立ち寄って情報を収集し、張保臯の保護と案内を受けて安全に帰国することもあった。張保臯の海上貿易、在唐新羅人の活動については、日本の僧侶円仁（794～864）の『入唐求法巡礼行記』に詳細な記録がある。円仁の838年～847年間の9年に及ぶ唐における求法巡礼が在唐新羅人の協力を得て実現した点、円仁が唐で接触した唐人と新羅人が同等な人数になるという事実が新羅人の積極的な海上活動、及び中国大陆における活躍をよく物語っている²⁾。

日本と朝鮮の貿易は主に修好使行貿易と倭館貿易を通して行われ、貿易の形態には、進上（貢物の進呈と返礼物）、公貿易（政府指定物資の交換）、私貿易（私的貿易）の三種があり、私貿易については朝鮮政府からしばしば禁止令が出された。朝鮮との貿易を行う者は当初は足利将軍（国王使）や有力守護大名（大内・細川・山名氏など）また九州探題、対馬の宗氏、肥前松浦氏などが派遣する使節であったが、三浦の乱（1510）を契機に、朝鮮通交に関する諸権益が対馬に集中し、倭館貿易の実質的実行者は宗氏一族を始めとする対馬の人々であった。

朝鮮の対日輸出品には、麻布・苧布・綿布・米・豆・大蔵経・高麗人参・虎皮などがあり、その中で最も大きな比重を占めたのが綿織物であった。朝鮮王朝時代を通じて少なくとも5千匹以上の綿織物が日本に輸出されたと言われる。朝鮮では15世紀半ば頃に綿業が全国的に普及したが、日本では16世紀に入ってから綿業が普及し始めた。

日本の綿業の普及により綿織物の輸出が朝鮮王朝の後期になると相対的に減り、高麗人参の輸出が増加した。前期までは高麗人参は自然産を採取したが、後期には栽培方法が開発されて多量の生産が可能になったからである。

高麗大蔵経は朝鮮王朝前期に日本側が積極的に請求した輸入品の一つであった。朝鮮王朝前期の日本国王使（尊府の使節）の渡来目的が主に大蔵経の請求にあり、大蔵経貿易は15～16世紀の日朝貿易の重要な契機となった。16世紀中頃まで日本に渡った大蔵経は40部以上であり、日本側が正式に請求したのは60回以上であったという。

日本から朝鮮へ輸出されたものは、銅・鐵・金・銀・硫黄などの鉱産物と蘇木・胡椒・水牛角・龍腦・沈香・白檀・象牙・犀角などであり、蘇木・胡椒などの東南アジア産の物産は多くの場合、琉球から中継されたものであった。日本から輸入された銅は朝鮮で鑄銭の原料、器具用として使われ、一部は銅鐘などの器物に製造されて日本に再輸出された。

興味深いのは、日本側が朝鮮の綿織物と高麗人参を購入するために支給された銀が朝鮮の商人たちが中国の白糸と緋緞を購入するのに多く使用され、その中国製の白糸や絹布がまた朝鮮人の手を

2) 円仁の838年～847年間の9年に及ぶ唐における求法巡礼過程での在唐新羅人とのかわりについては、エドウィン・O・ライシャワの『円仁 唐代中国への旅 - 「入唐求法巡礼行記」の研究』（英文原著1955年、田村完誓訳、講談社、1999年）に詳しく言及されている。

通して日本と交易されたことである。学者によってはこの中継交易のルートを「シルバー・ロード」とも呼んでいる。

「唐人貿易」と呼ばれる江戸時代に中国本土や東南アジア各地から来航した中国船との貿易は、主に長崎の唐人屋敷を拠点として行われた。清朝の初め頃には、遷海令により日本への渡航が禁止されたため、明の遺臣鄭成功父子や福建沿岸・台湾の密貿易商によって行われたが、1684年に展海令が出されたことから、江蘇・浙江二省を中心とする中国本土からの唐船の来航が急増した。このため、幕府は1685年の定高（さだめだか）制を初めとして唐船の取引高や来航船数を制限した。中国側は清朝の弁銅政策に基づき、官商（有位官の特定1家）や額商（特定の民商12家）など銅の集荷商人として日本に来航し、生糸・絹織物・薬種・砂糖などを日本に輸出した。唐人貿易を通して日本から清に輸出されたのは、初期の段階では金・銀であり、後になると銅の輸出が中心をなし、他に銅器・蒔絵・伊万里・俵物などがあつた。

三、異国・異文化の中での接触と交流及び生活

新羅坊・倭館・唐人屋敷は、それぞれが異国の中に設置されたため、前近代の東アジアにおける異国・異文化の中での接触と交流及び生活の様相を伝えている。

新羅坊・倭館・唐人屋敷について調べると、まず目に付くのが異国の中に自分たちの文化、自民族の文化を濃厚に持ち込んでいたことである。

登州文登県の赤山法華院は新羅商人張保皋が創建した寺院であり、そこでは夏冬の講会に集う新羅人が200人にも上り、仏教儀式がほとんど新羅の習俗に拠って執り行われたといい、8月15日には寺や家で餛飩や餅食を添えて新羅の仲秋の名節（秋夕）を過ごし、そういう時にはその地域の新羅人たちが集まり、連続3日間、飲酒歌舞を続けたという。この赤山法華院は、仏教のお寺でありながら、泰山府君（日本では「赤山明神」と呼ばれた）と言われる道教の神をも祭り、日本で「新羅明神」と呼んだ新羅固有の神も祭られていたようである。日本の僧侶円仁の『入唐求法巡礼行記』には、青州にも赤山法華院のような新羅人が開いた寺院が2ヶ所存在していたことを記している。

新羅坊が唐の行政的管轄下にありながら相当な自治が行われていたことを考えると、赤山法華院の場合と同じように、在唐の新羅人社会は集団居留を特徴としながら、新羅の風習をそのまま唐に持ち込み、故国との緊密な連帯感を保っていたと推定される。事実、新羅坊における自治行政機関である勾当新羅所は新羅の使節の接待に務めることもよくあつたようである。

倭館の場合、そこは朝鮮の中の日本の縮小版であつた。江戸時代のほぼ全期間を通して存続した釜山の草梁倭館を見ると、10万坪の面積を持ち、同時代の長崎の出島の約4千坪より25倍に相当する大きさであつた。倭館の敷地には、館主屋、開市大庁（交易場）、裁判庁、浜番所、弁天神社、東向寺、住居があつた。倭館に居住することを許された日本人は、対馬藩から派遣された館主以下、代官（貿易担当官）、横目、書記官、通詞などの役職者やその使用人だけではなく、小間物屋、仕立屋、酒屋などの商人もいたし、対馬藩の藩医・町医及び朝鮮語稽古の留学生も滞在していた。この倭館の住民は常時、400人から500人が滞在していたと推定され、対馬から交易船が到着すれば、倭館滞在者がさらに増えた。この倭館での日常生活は日本とほとんど変わりがないほどであつた。

中世には、朝鮮に「三浦」と呼ばれた三ヶ所の倭館（富山浦倭館・乃而浦倭館・塩浦倭館）が存

在し、朝鮮側の管理が緩やかだったこともあり、さまざまな職業の日本人（男女とも）がそこに集まり、倭館の周辺には「恒居倭」と呼ばれた長期滞在者たちも居住し、朝鮮の中の日本人社会を形成した。

長崎の唐人屋敷の場合も、日本の中の中国（清国）であって、その中には、通事部屋・乙名部屋・礼場など清国の通商役人の施設、一般の宿泊施設、辻番小屋・牢屋・市店（交易商品の展示場）などがあり、唐人屋敷の中国人たちのための土神堂・関帝堂・観音堂・天后堂など道教・仏教の宗教施設も設けられた。長崎の唐人屋敷にも常時数百名の中国人が滞在していたと見られる。

戦国時代から江戸時代初期にかけて、西日本各地には唐人町が散在し、日本に中国人社会を形成し、長崎では一部自治も認められたことがあった。

以上の新羅坊・倭館・唐人屋敷の事例から、受け入れ側の事情により異国人を一定の地域に限定して居住させる側面がもちろんあるが、一方、前近代にも、近代・現代にもほぼ共通している事実、異国で生活する場合、同族同士集団で居住し、自分たち、自民族のコミュニティを形成することが多いという点である。前近代においても民族同士の異質性を自由に乗り越えることは難しかったとみられる。

一方、こういう拠点を通して異国で生活していた人々は、前近代の東アジアの世界において、常に国家と民族の境界を跨ぐ存在であり、民俗学でいうマージナル・マン（境界に生きる人間）の性質を備える場合が多かった。

9世紀において東シナ海の海上貿易を主導していた新羅の商人張保臯が正にそういう人物であって、青年期に唐に渡り、徐州武寧軍の少将までなり、新羅に帰国した後は南海の海上交通要地に清海鎮を建設し、自ら大使を務め、日本とも密接な関わりを持っていた。張保臯の海上貿易の成功要因で最も重要な点が東アジアの国家の境界に立脚し、新羅、唐、日本の朝廷の強い統制を受けない自立的活動が行えた点にあると考えられる。新羅と日本との外交関係の冷却期にも彼の日本との貿易活動は続けられた。在唐新羅坊には、張保臯と同じように、唐・新羅・日本の間を比較的自由に往来し、数カ国の言語に通じ、国籍すらはっきりしないマージナル・マンが多かったようである。円仁の9世紀における9年3ヶ月に及ぶ唐での仏教巡礼紀行が成功できたのも、新羅と日本の外交関係とは別のところで国家の間の境界に生きる在唐新羅坊の新羅人たちの人間的ネットワークによる絶対なる協力があったからである。

中世の朝鮮の倭館とその周辺に居住していた日本人たちの中にも境界性人間が多く、国籍・言語・服装などから日本人が朝鮮人、または中国人のいずれかの帰属を判別することが難しいこともあったと言われる。そしてこのような境界を跨いで生きていた人間たちが東アジアの中世社会の活力素の一つになったのも事実である。

新羅坊・倭館・唐人屋敷はそれぞれ異国の中の存在であり、そこを拠点に異文化間の交流がなされた事実も注目に値する。

新羅坊を拠点として異文化間の交流の事実は史料からは確認できないが、唐に多数の新羅人が居住し、多くの新羅坊、新羅人の寺院、新羅人の宿屋が存在していたことから、そこを拠点に新羅人と唐人の生活文化から精神文化にわたる異文化の交流が行われたことは充分想像できることである。

近世の釜山の倭館（草梁倭館）においては、日常的に日本人と朝鮮人の接触・交流が行われ、お

互いの接待のための饗宴を通じた食文化の交流が最も盛んであり、饗宴の席では両方の音楽も交流されたりした。

長崎の唐人屋敷においても、さまざまな文化交流が行われ、唐人屋敷から中国の卓袱(しっぽく)料理、唐人踊りの明清楽、竜(じゃ)踊りや精霊流しなどが長崎に伝わり、また仮名や浄瑠璃に親しむ中国人も現れたりした。

新羅坊・倭館・唐人屋敷は異国の中の異質な存在ではあったが、漢文化・仏教など共通の文化的要素を持ち、民族的・地理的にも近い関係にある東アジア諸国の中の存在であったために、近世の西洋からのキリスト教伝来に見られるような深刻な文化摩擦を引き起こすようなことはなかった。

新羅坊は中国の歴史上でも最も国際的に開かれた時代の唐代に存在していただけあって、高度の自治が保障され、在唐新羅人も開かれた環境の中で国際的活動を行うことができたと思われる。

一方、倭館と唐人屋敷の場合は、朝鮮側の管理が緩やかだった中世倭館を別にすれば、朝鮮と日本の閉鎖政策、または鎖国政策の時代に存在しただけに、そこには出入りから始まり、さまざまな規制が敷かれ、そこを拠点に異民族同士が自由に交流することは事実上難しかった。そういう中にも、国情の違いが反映され、近世の倭館は男性だけの世界になり、女性の接近は厳格に禁止され、唐人屋敷には遊女の出入りが認められた。

むすび

以上、概略的ではあるが、新羅坊・倭館・唐人屋敷を同じ土台の上に載せて考察してみたことは意味があると思われる。

新羅坊・倭館・唐人屋敷は前近代の東アジアの世界における確かな越境経営の先例であり、そこを拠点に異文化間の交流が行われ、その住民たちは国家と民族の間の境界に生きながら、国家的次元とは異なる人間的ネットワークを活用し、貿易と国際活動を行うことが多かった。グローバル化が進む現代社会において、前近代の東アジアの新羅坊・倭館・唐人屋敷の先例は示唆するところが大きいように思われる。

参 考 文 献

円仁著・足立喜六訳注・塩入良道補注『入唐求法巡礼行記』1・2(東洋文庫157・442)

E・O・ライシャワー著・田村完誓訳『円仁 唐代中国への旅 「入唐求法巡礼行記」の研究』(講談社学術文庫、1999年)

田代和生著『倭館 鎖国時代の日本人町』(文春新書281、2002年)

村井章介著『中世倭人伝』(岩波新書274、1993年)

山本紀綱著『長崎唐人屋敷』(謙光社、1983年)

その他、新羅坊・倭館・唐人屋敷に関する歴史事典の解説項目、インターネット上のサイト・記事など参考

